貴州旅情　鳳　凰　ホン　ファン　feng huang

8：45　長沙駅

吉首行硬座2階建寝台車で鳳凰に向かう。

初めて乗るタイプである。とても中国の〈失礼〉火車とは思えない垢抜けた車体である。何だかワクワクさせてくれる。いつか、長崎から博多へ向かう時に乗った快速がこんな感じのしゃれた車体だったのを思い出す。

先日、蘭州から西寧への昼の硬座も2階建て火車だったけど今日のは寝台である、何といっても、約14時間乗ってるわけだからやはり良い列車にかぎる。

どんな構造かというと、1,2階、二段づつになっている。つまり、上段無しのゆったり二段である。ぼくと小燕はあいにく続き番号なのに背中合わせの席になってしまった。

小燕は不満らしく、自分の向き合わせの乗客にしきりに交渉を始めた。　はじめは無視していたその客もとうとう最後は根負けしたのか、しぶしぶ席を替わってくれた。彼女がニャリと笑って打ち明けた話では

「アタシ　イイマシタ　アタシタチ　シンコンリョコウ　デス。イッショムキデナイト　さびしいデスネ。」と

あの人「ショウガナイネ」と言ってたよ。・・・・・・・・とクスリと笑った。

夜汽車も慣れてきた。先ほど駅前の五一大路にある「松花江餃子店」でふたりで三人分のギョーザを食べてきた。来る前にウォルマートでふたりの好物であるスニッカーチョコレートも8個買った。もちろん「アハハ」もしっかり2本買ってきている。

ところで鳳凰は、どんなところなのか?

鳳凰は長沙に滞在している日本人留学生や社会人等、ほとんどの人が「行かれましたか?」「こちらにいらっしゃる間に是非行かれるといいですよ。」と薦められる所である。彼らが言うには

「もしここ長沙にいるから鳳凰は近いけど日本に帰ったらわざわざ鳳凰までは来ないと思います。日本人用ツアーはありませんし」と。

折角近くに居るのだから、こんなチャンスはないというわけである。

「鳳凰って一体どんな感じの観光地ですか?」

と尋ねると

「そうですね、古い昔の中国が残っています。昔にタイムスリップですかね。」

それ以外はズバリと表現してくれない。長沙にいるぼくの近辺の中国人もハッキリとした答えをくれない。よく訊いてみると

「実はまだ行ってないんです。行ってみたいのですが」

と言う答えである。

それでも少ない言葉からイメージをまとめてみるとこうなる。

水郷・老街・古城・少数民族・南の万里の長城・沈征文〈作家〉・・・・

吉首の駅に着いたのは夜明け間もない頃だった。

駅前に迎えの現地ガイドが来ることになっている。

ガイドが見つかり、小燕がガイドと打ち合わせしていると、そこに同行の他のツアー客が来たようである。

小燕がその同行ツアーと顔をあわせたが「アイヤ!」

・・・とびっくりした声をあげた。

「一緒のグループはあなた方ダッタデスカ?」〈中国語デス。〉

・・・大きな声（原語）が飛び交う。なんと、

寝台車のぼくたちの席の下段のふたりの男性とその隣のブースの若いふたりの女性4人が今回の鳳凰グループだったのである。

女性のうちの1人はまだ高校生か?そんな感じのギャルで何度も夜中にぼくたちのブースの男性（お父さん?）を尋ねてきて、実はうるさかったのでよく覚えていた。　かくて、たった6人という、今までのツアー最小単位の2日間の旅が始まったのである。

今日の見学コースはまず鳳凰古城へ行き民宿に入り午前中は古城の中の見学、船に乗って**沱江下り**そして、昼飯をとった後南方長城というミャオ族の作った長城を見学して、そのあと、黄絹橋古城をまわる。

明日はミャオ族の部落、大きな瀑布、それから鍾乳洞を見学して夜行で帰って来る。

まず沈征文の旧居を見学する。沈征文は1902年鳳凰で生まれた小説家で生涯に70冊の本を書き、鳳凰や張家界を世に紹介した人として有名である。

旧居は四角い中庭を4つの建物が取り囲む四合院と呼ばれる建て方で正面の建物の中央の部屋には沈征文の肖像が飾られている。

中国語を日本文に翻訳して紹介された写真本から沈征文のことを次のように書かれている。日本文の訳が少しおかしいけど原文のまま記してみる。

・・・15歳の時、生まれ育った家をでて、生命の道が始まりました。彼は酉水、ゲン水流域で何年間か逗留して、青春の夢をもって、美好的な筆と心で《辺城》《長河》《ショウ行散記》《中国古代服飾研究》など世界でも有名な文学作品を書いた。20歳のとき、単身、北京に出た。そして、一生の間に70冊の作品を書いた。

代表作のかずかずは北京だけではなく、世界をも征服した。寂しい、不安定、晩年に、彼は中国古代服飾に専心した。彼の優しい、悲しい心、彼の負けない品格はわれわれに文学の財宝だけではなく精神的な財宝も残してくれた。最後、彼は故郷に帰り、自然とともに属した。

彼は自分の生まれ育った故郷の素晴らしさを世界のひとに知らせたく晩年はそのために腐心した。

今、鳳凰はその素晴らしさを世界の人たちの憧れとなった。

更に写真本の紹介は続く、

永遠の鳳凰

鳳凰の美は派手な着飾りが人目をひきなり、圧化粧ではなく平あっさりして奥ゆかしい清純が安らかである。おっとりしていて美しい。

それは古い出会って昔かたぎではない。それは高潔であり名声が物欲にとらわれない。

横から見ると一幅の絵に見える。縦から観ると詩一首に見える。遠く見ると一文字に見える。近く見ると本一冊に見える。

浅く深く見てもそれは歴史に青レンガ一枚に見えて文化の地図一枚です。

画帳を開くと一条の河流が古い城をたずさえて真正面から顔に当たってくる。

柔らかで美しいのはやはり**沱江**です。

沱江は深い時間の中で浮き上がるニジである。柔らかで、青色で、澄み切ってで、変化に富んでとらえがたい。

沈征文（1902～1988）

ところで、

鳳凰大橋の上から虹橋方向を眺める景色は本当に素晴らしいものだった。

しかし、この光景をもっと具体的な言葉で表わすとしたらどう言えばいいのだろう。

先に表現したように「本当に素晴らしい」「ヘンピャオレン美しいデスネ」「うーん！！」などと副詞や形容詞を並べるだけで他に適当な表現方法が見出せない。それはつまり、風景をそれぞれ見る人の感性がどうとらえるかにかかっているからである。

鳳凰を薦めてくれた人たちから明確な理由を得られなかった訳が今、分かったような気がした。

鳳凰のこの景色を言葉で表現するのは困難なのである。現実の風景の美しさよりその風景から思い起こされる恐らく見たこともない遠い昔の想像の風景をタイムスリップして見ている不思議さ、みたいなものといったら少し近いのかとも思う。だから、それはいわゆる原風景とも違うのである。

「それでいいんだ。」とぼくはこの景色を眺めながら思う。

そして今、ぼくもまた同じように人に薦めたいと思う。

《鳳凰に行ってみませんか?そして、鳳凰大橋の上から岸辺で洗濯をしている老若の女性達の姿を、そして彼女らの叩く洗濯棒の音を聞いてみましょう。

、無邪気に裸で泳いでいる子供達の姿を追いながら、はるか３００年前?（日本だと安土桃山か?）の明から清の時代の古い中国の景色を、アナタが感じることが出来ます。きっと、とても貴重な視覚体験をすると思いますよ。》

・・・・・・・・・・・・・・・ぼくはじっと目を閉じて頭の中に浮かぶはるか昔を想像していた。パタパタと叩く洗濯の音、はしゃぎまわる子供達の歓声が今聞いている耳から、頭の中の想像のシーンの中のぼくの耳に、重なっていった。

６人のグループはそれは賑やかなものだった。

一緒の食事はまるで家族旅行の雰囲気そのものになっていた。書き出したらきりがないほど愉しいシーンの連続だった。

小燕を連れて来たのは正解だった。主役はぼくであったり、１７歳のコギャルだったり、それぞれの行動、買ったみやげの批評から、誰かが買い物をすると、あとの５人が側にいてなんやかんやと雑音をいれるやら、そのうち、ぼくにはヨシ、ヨシというあだ名がついてしまった。

ぼくが無意識によーし、よーしと気合みたいな声をよく出すからなのか

よく分からないけど。

バスの中では一緒に歌を合唱したり、とうとう

「ヨシ、ヨシ　ひとつ日本の歌を披露してくれ。」と自分でさくら、さくらをロずさみながらぼくを促す。そして、周りは拍手、拍手である。

いろいろな質問も飛んで来る。

「こないだ日本映画観てたらメシメシといってた、あれどういう意味か」

「たぶんご飯（ミーファンダイース）のことだろう」と答えておいた。

雨の上るのを待つ。そして、登り始める仲間

二日目に行った滝：上り口で昼飯を食べた。ものすごい大雨が降ってとても滝口まで行くことが出来ないと、ガイドの小李が言う。確かに沢山の観光客がここでトランプやマージャンをして時間つぶしている。雨が上がるのを待っているのか。

「雨の中でも,もし行きたければ連れて行く」と運転手の王さんは言う。
「アタシイキタイナ。」
と小燕がぼくの顔を窺がう、ぼくは雨が大嫌いである。あのピチョピチョと顔や体に滴れ落ちるのが我慢ならない。手だって濡れるのが嫌いだから。あの中国製の薄い5元の雨合羽は二枚重ねてもどこからか、ほとんどは首からだけど入ってくる。

「ネエ　イコウ　イコウ　」小燕はぼくの顔を見て促す。
「ティンブドン」（聞こえませんネ）と答えたら膨れてしまった。
そうこうしているうちに奇跡的にも雨が上がったのだ。

靴を藁ぞうりに履き替え（2元）雨合羽を被り我がにわか家族の滝見行列が始まった。
　あの道中の数時間（2時間？）の出来事、別に特別なこともないただの行軍だったけど今思い出しても鮮明な映像で浮かんでくる愉しい時だった。
鳳凰でのかずかずの行動は今回のぼくの旅のなかでは何か特別なページのように思えた。
旅はやはり、独りよりも友といろいろを分かちあいながらの方がいいのかなと思ったりする。声を出さない独り笑いは確かにさびしいですネ。

次は貴陽へ行きました。

考えてみると目まぐるしい旅を続けている。
　何もこうまで急がなくてもいいのにと思うのだが・・・・。
　自分で決めているのだから仕方がないが、つまるところ経済と曜日に左右されてこうなっている。
　打ち明けた話がこうだ。今、長沙のホテルに泊ると一泊３００元はかかるのである。　だからその分、旅先にいた方が無駄がなくていいと思う。それと、週末は小燕が何処か連れて行けと言ってくるのでなるべく空けておきたい。

まあ、そんな理由で目まぐるしくなっているのである。
　３１日の朝：長沙に着いた。今夜は過程大酒店に泊って、明日は昼２：００の飛行機で貴陽に行かなければならない。
　洗濯時間は３１日の朝の数時間である。益田氏の授業の間に済まさなければならない。
　１日の昼までには取り込んで旅行バッグに詰める。《今度はリュックで行こうか》」
３泊４日の旅だけど郊外（山や滝）が多いので荷物が多そうでもあるし？。いつも行く前のシュミレーションで失敗する。

　小燕を通して華天旅行社に費用をサービスしてもらった今回の貴陽ツアーは往復飛行機を利用して３泊で１５００元だった。
　日本円で２万円ほどだから、まあまあといった料金である。
　解放路の華天ホテルの１階に華天のサテライトがある。
　ぼくは８階の社には行かず、いつもここで小燕と相談する。
　小燕のほかに３名ほど事務の小姐がいてもう顔なじみだ。
ここのところ石油の値段が上ったので飛行機が値上がりして、割引がほとんどなくなったので厳しい,と華天小姐は言っていた。
　小燕が持ってきた旅行表を見るとこうなっている。
　第一天：１４：００黄花空港発１５：１５貴陽空港着
　　空港まで導遊（ガイド）の迎え有。市内の名勝を案内して弘福寺（チェンリン公園）　　ホテルへ
　第二天：黄果樹瀑布（ホワングワシュウブブー）約２時間半かかる。
　　原始苗寨（イエンスーミャオザイ）
天台山　　天竜屯保　　ホテルへ

第三天：織金洞（ズジンドン）中国第一鍾乳洞

第四天：朝８：０５貴陽空港～９：０５長沙黄花空港

・・・・旅も少し重ねてくると、いわゆる旅の感慨というものが薄れてくることがよく分かってきた。

旅の楽しみの２～３０％はあの旅立ちの朝の（昼、夜の場合もあるが）何ともいえない気の張りにあるといっていい。

詳しく言うと、前の晩から、当日へ、そして、家を出て空港までの車中、そして空港ロビーへと続く一連の流れの中で湧き上がってくる何とも言えない緊張感、まさに《旅立ちへの序曲》とでも言える高揚感なのだ。

ところが出入りが激しくなると、その辺の高揚が薄れてくるのである。

ツアーコンダクターの友人がいつも羨ましいと思っていたけど案外彼らは今のぼくの気持ちに近いものがあるのかも知れない。

貴陽は我が朋友：深栖氏が昨年、独りで旅して来た地である。

鹿児島から見た時は上海経由で殆んど雲南に近い辺地に見えていたけどここ長沙から眺めると、西隣の省である。

この前というより２日前に居た鳳凰からはほんの数時間バスに乗れば着くような距離である。後で地図を見ていて、これは帰らずに周遊した方が良かったのか？と思うことだった。

今日の長沙の天気は珍しく青空が広がっている。

南方航空ＣＺ８６５６機は定刻通り２：００に黄花空港を離陸した。

長沙での短い１日はすべて上手くいった。天候に恵まれたからである。寮の前の校門を何度か行き来したが生徒と会えなかったのがちょっと残念だった。

ホテルへ

昨夜、チャンスがあったら安徽から来ている仲良し二人組の呉林小姐と李碧雲さんを平和堂７階のブラジル料理でご馳走してあげようと何度も寮に電話したけど通じなかった。いつも授業態度が熱心で、ぼくはこのふたりに目を向けながら授業をしていた。

３：１０　貴陽空港着

空港に迎えに来てくれた国際旅行社の張騂くんの車で１時間ぐらい（約１０キロ）で貴陽市街地に着いた。

早速、**甲秀楼**を訪れた。

甲秀楼は南明河の中洲に建つ高さ２２ｍ三層の楼閣である。

河の中の巨岩の上に立っている。明の時代に建てられた美しく歴史を感じさせる建物である。

楼閣の上からは市街地を眺める事が出来て夜はライトアップされとても美しく、中では**茶館**が各楼ごとにあり、市民の憩いの場として利用されているようだ。

この後、市の北西部（ぼくの泊るホテルもこの近く）にあるチェンリン山の中にある弘福寺に行った。ロープウェイがあったけど九曲径と呼ばれる登山路を登った。

弘福寺は海抜１３００ｍの山頂にあった。

園内には麒麟洞という洞窟があり国民党と共産党の内戦中に**張学良**が幽閉されていたところを見学した。

貴陽のガイド・張（ジャン）くんはかっこいい若者で、結婚していてもう子供も居る.と言ってましたがとてもそうは見えなかった。

「貴陽名物を今夜、食べたいですね」

とぼくが言うと、

「　しゃぶしゃぶなんかはどうですか?」と彼が言う答えたので「いいですね。」と、今夜の夕飯が決まった。

もう6時も過ぎていたので「じゃあこのまま行きましょう。」と、早速、街に繰り出した。

街の一番店だという大きな餐館でる。あいにく個室しか空いてないという。「OK」と答えて案内された。

写真のような沢山の名物菜が次々と出てくる。

魚星草（ユイシンツァイ）は殆んど食べれなかった。又、日本豆腐で失敗した。あのソーセージ形の黄色い玉子トーフを見たら「シマッタ」と思い出した。何度やられたことか。又、忘れていた。

長沙で、西寧で、同じ失敗をしたのに、豆腐という名ですぐ注文してしまう。それにしてもここの料理にはあのぼくの嫌いな香菜（シァンツァイ）が殆んどの料理に入っている。

アヒルの内臓もダメ。皮タン（卵）も嫌い。酢菜も折という料理も美味しくない。土豆（じゃがいも）かろうじて食べられる。・肥牛肉のシャブシャブを二人前注文、お湯に入れるとすぐちじんでしまう。

タレがとても辛くて味が変で食べられないので「しょうゆ」と「酢」をもらって自分でタレを作って食べた。これは旨かった。もう一皿、こんどは羊肉を注文した。

余り食がすすまなかったので張くんに悪いなぁ、とは思ったが、これだけは仕方のないことだった。

次は　黄果樹大瀑布へ行きます。

某社の旅行ガイドから・・・黄果樹大瀑布の紹介

・・白水河の激流が作り出す9つの滝が集まる黄果樹。そのうちの最大の滝が黄果樹大瀑布だ。高さ68m、幅81mから流れ落ち大きな水音を立てている。滝を裏側からみることができるのが興味深い。

明日は朝7：00に迎えに来ると言う。いつものミニバスによる黄果樹ツアーである。たいていその日のガイドから部屋に電話連絡がはいることになっている。

この前の青海湖ツアーで懲りているから美味しくない名物しゃぶしゃぶを張くんと食べた帰りに近くのスーパーでパンを沢山買って帰った。それと屋台でおいしそうなバナナを一房。とにかく安いものだからつい買いすぎてしまう。

実は部屋に戻ってびっくりした。

籠の中にりんごが2個とかわいい桃が3個入っている。おまけにミニカッターまで付いている。こんなサービスは初めてだ。

結局このサービスは滞在中続いた。最後の日は食べ残しの果物とパンやビスケットで袋がいっぱいになった。

ホテルはそれぞれ、どこかいいところがあるものだけど、ここチェンリンホテルは湯沸かし器もベストに作動したし、シャワーの湯も、熱さ湯量とも充分。TVも良く映る。

ホテルの浄水湯沸かし器。上のタンクに水が入っている。

右は今回のミニツアーの仲間たち。

部屋はあまり豪華とはいえない。日本のビジネス・ツインといったところだがいろいろな機能が正常だということの方が、旅をしていると余程有難いのである。

取るに足らないことかもしれないがスリッパの横に丸い簡易靴磨きスポンジが二個置いてあったのはとりわけ嬉しかった。

三日間一度も按摩の誘いがなかったのはちょっと寂し

かったけど（深栖氏は、貴陽は夜の電話がうるさかった、と言ってたけど）泊るところで違うのだろう。

７：００きっかり電話が鳴りガイドの声がした。

「馬上下来！等一下」いますぐ行きます。と言って電話を切る。

ミニバスにはふたりの女性が乗っているだけだった。

この前小燕から習った　只会一点点！は初対面の言葉としては、なかなかいい言葉だ。相手がすぐニッコリ笑うから説不好より会話としてはウイットに富んでいるのかもしれない。

最終的には１４名のグループツアーになった。その内の１０名ぐらいは一つの団体のようで、皆知り合いのようだった。きさくな人たちである。でもどの省から来たのかは分からなかった。

ミニツアーの良さはお互い写真を撮りあったり、食事のときの会話などが仲間内として出来るので、独り旅でありがちな人とのフェエンスがない点が有り難い。

でも、いつも思うけど、モット中国語が聴けて、喋れたらどんなに楽しかろう、と思う。頑張らなくっちゃ。

今日みんなで食べたお昼は美味しかった。ぼくはこういうツアーの時にみんなで食べる食事はわりとＯＫ（美味しい）と思うのに昨日のように改まって餐館みたいなところで注文して食べる時は未だ美味しかった試がない。

・・と言うと注文してくれた相手に悪いけど、本当だから仕方がない。

いちばんとばっちりを食っているのが小燕と李黎だろう。

「アナタ自助菜（セルフ式）　ジャナイト、、ダメネ！　アタシイッショウケンメイ　エラデモ　アナタ　タベナイ　カナシクナテ　アタシモ　ショクヨク　ナクナル。キヨハ　タベタクナ　クテモ　タベナサイネ！」

いつか、とうとう小燕が怒った時があった。

チョッと話は変わるけど、ひとつ中国人と一諸のツアーで気になることは彼等はバスや車の中でよく窓を開けることでだ。タクシーの運転手なんかも殆んど運転席と助手席の窓を開けて走っている。

呼吸気の弱い人が多いのか？風に当たるのが好きなのか？真夏でクーラーが効いてても開けたがる。

寒いときには本当に困る。ぼくは身体が水に濡れるのと走っている窓から入る冷風がとても苦手である。

更についていないのか、ぼくの前に座る人に限って窓を開けたがるから不思議。寒くても中国人は閉めてください、などとはまず言わない。だから、ぼくも言うわけにいかず、防御するしかない。これが、中国人と一緒の乗物での一番つらいことである。

アジアーの大滝を堪能したあと、また古いお寺を訪ねることになった。城山を照国神社から登るような感じだ。頂上にある禅寺は２００年の歴史というから清朝に建てられたものである。

天台山の山頂にある天台寺、頂上までの石の階段は自然の石をそのまま積み重ねた階段でその当時（２００年前）のままの階段なのだろう、バームクーヘンのようで珍しかった。

そうそう、今日は帰りにバスから見たアクシデントを語らなければならない。一つは、よく見る交通事故である。１０トントラックが見事に横倒しになっていた。

幸い路肩側に上手く横転していたからよかったけどこれがセンター側だったらおそらく道路全体を覆っていたことだろう。と言うことは今日の瀑布見学ツアーはおそらく中止か、変更になっていたに違いない。

もうひとつは更に仰天した。、通り過ぎてから夢を見ているような気がした。反

対側斜線に止まっているバスのうしろで、女同士の取っ組み合い（の末だと思うが）の喧嘩のシーンだった。

顔から血を流している女の上に馬乗りになって右手にはかかとの尖ったパンプスを、下になった女の頭や顔に振り下ろそうとしている光景・・・・周りには止める風でもなく見ている5,6名の男たち・・・・あっという間の流れの中で見た光景だった。まるで映画のロケーションを見ているような気がした。

明日は織金洞（ジンジンドン）という中国第一の鍾乳洞を見学ということらしい。

今日のコースは目的地（織金洞）まで3時間ぐらいかかるらしく朝、6時に迎えが来るという連絡が張クンから携帯に連絡があった。念のために5時にホテルからMCをするように頼みました、と言う。

いつもミニツアーは朝早いので困る。最終出発は僕が乗ってからいつも1時間半は過ぎる。いつも最初の方の順番になっているようだ。

それにしても今朝はおどろいた。4時にモーニングコールが掛かった。一時間も早い呼び出しである。誰かが間違ったのだろうがえらい迷惑である。あと2時間、どうしてくれるのか?寝るわけにもいかず仕方がないので日記を書いていた。

こんな日に限って迎えが来たのは6時半だった。

すでに　4人の先客が乗っていた。一組の夫婦と一組の親子（といっても子の方は20歳過ぎた娘さんだけど）。

中年夫婦のうちの男性がにこにこと話しかけてきた。

「*Can you speak English?*」

結構、流暢な英語だった。

大体、OKと答えておいた。おかしかったのは最初に出た言葉が中国語の大概（ターガイ）可以（クァイ）だったことである。

「Are you ready take Breakfast?」又英語で質問が来た。

なかなか頭の中の言語切り替えが出来ないのか、

「已経イージン」とか「チー（食べる）」とか言う単語が先に出てきてしまう。

バスの中は10名になった。これが今日のメンバーだろう。いつもツアーのメンバーが替わるので面白い。

本日はかなり騒がしそうである。

しばらくするとガイドの女性が車から降りてしまった。しゃべりまくる運転手がひとりである。あちこちからツアー客が運転手に声を掛けている。

どんなやりとりなのか僕には「ティンブドン」だが、おそらく「ガイドはどうしたんだ。」「今日はガイドなしなのか?」とでも聞いているんだろう。

しばらく行くと大きな橋があった。たぶんそこも観光コースなのだろう。

クルマが広場のようなターミナルとはお世辞にもいえないようなところに駐車して、皆、運転手の後からぞろぞろと橋に向かって歩き出した。

むろん、何も分からないぼくも後をついて行く。

橋から眺める景色、とりわけ下に見える渓谷が素晴らしかった。

フト、紙ヘリコプターを飛ばしたくなった。

いつか、屋久島の登山の帰りに安房の近くに新しく架かった大橋から飛ばしたヘリコプターを思い出した。

作って飛ばしたら気持ちがいいだろうナ、と思いながら紙がないのが残念だった。

相変わらず、かの中国人は僕のそばで英語を使いたがる、どちらからですか?と聞いたら、台湾から来た。という。奥さんの方は主婦というよりは仕事人のようでメンバーのなかでも飛びぬけて垢抜けている。

バス乗り場付近には、いつの間にかももを売るおばちゃんが2,3人並んでいた。みな試食をしている。何人かが買っていた。又、バスの中で皆に配るのだろう。ミ

ニバスツアーでよくある光景である。こうして、皆が仲良くなっていく。そして、かならずツアーリーダーがいるものだ。

９：３０　まぶしい太陽の光がバスにさしこむ。周りの景色はたてよこ２０Ｘ３０位に綺麗に仕切られた水田が延々と続いている。また台地には棚田が美しいカーブを描いている、なつかしい日本の風景に似ている。

時計は１１：００を過ぎているのにバスは小さな町をいくつも過ぎやがて山道に入っていった。運転手もよく知らないのか?時々バスを止めては人に聞いている。

だんだん道は険しく１０００ｍは上ったように思う。

巨大なダムの工事場を過ぎ、とんでもない?岸壁に小さな坑道（トンネルとはいえない）クルマが通れるのだろうか?そこをミニバスは入っていった。

もし、こんな中で離合でもすることになったら?万一、壁がくずれて生き埋め?いろいろなことがよぎり、ほんとうに怖かった。灯かり一つない坑道を何分かかったのだろう。向こうに小さな光が見えたときは心底、ホッとした。

トンネルを出てからも怖いシーンは続いた。

左は岩壁が張り付いていて右は断崖絶壁（もう窓から下を見るのが怖いほどの）おまけに、道路がときどきえぐられているところがある。

突然!目の前に、落ちてきたばかりと思われる岩石が、ドーンと現れる。クルマをとめて、皆で石を動かしてバスは進む。皆、はしゃぎながら大声で作業しているのが奇怪いである。

間違っても自分達のクルマには落ちないものと信じているようだ。

ここで、お陀仏になったらぼくの消息はいつ、どうやって伝わるのだろうか?バッグに名刺が入っていたっけ、パスポートはホテルに置いて来たし。

《もしもの事があればここに連絡を。》と中国語で書いたカードを作ってポケットに入れて置く必要があるナ、と思った。

中国でも最大級の規模を誇るこの織金洞（ジージンドン）は別名を地下天宮と呼ばれている。洞の総面積は約３０７ｋ平方、総延長距離は１２．１ｋｍで一番広い洞は幅１７３ｍ、高さ１５０ｍ、東京ドームと?変わらない広さである。

ここ安順の近辺は鍾乳洞の宝庫と言った感がする。

ぼくも中国で一体いくつの鍾乳洞に潜った事だろう。スケールの大きさではここ織金洞はどこにも引けをとらないものだった。

ただ、いつも中国の鍾乳洞に行って思うのは、洞の中の色電球のケバさである。幻想的という感覚が違うのか?あれが綺麗だと思うのか?よく理解できないが、ここと言う見所に限って七色のネオンに照らされている。その前で一枚５～１０元の記念撮影が繰り広げられる。

まあケチをつけるのはよそう、素直に見事な迫力さえ感じる洞だった。特に魅せられたのは床面にいっぱい広がる黄竜の湖面と同じ蓮模様の湖である。

黄龍のようなエメラルド色の水はなかったけど石灰石が何千年にもわたって出来た自然の美は見事だった。

ホテルに戻ったのは7時が過ぎていた。

３日も貴陽にいて、未だ繁華街に出ていなかった。今夜が最後のチャンスだった。

荷物はムービーを一個だけにしてホテルのロビーに下りた。フロントにいる可愛らしい服務員に貴陽的最繁華的地方在那里?と尋ねたらニッコリ笑顔で紙に書いて教えてくれた。

大十字・小十字・噴水池　是　ルァ市区

その後に「Ｎｉ　是　那　里　的?」と書いてぼくの顔をのぞいた。　ぼくはすかさず「日本来的。」と書くと、一瞬、目を丸くしていた。

「我想去坐的士。」と言ったら両手の人差し指をクロスして打車十元と言った。

９時半ごろに大十字（大道路の交差点に屋根付きの天橋が架かっている。）に着いた。その歩道橋を五段ほど上りかけたところで見知ったような女性にあった。

一瞬、誰！!こんな見知らぬ街で?と思った瞬間、相手の女も下りかかった足を止めた。昨日、一日一緒だった瀑布ツアーの女性だった。

ニッコリ笑って反対側の公園の方を指差して何か言った。

・・聞き取れなかった。分かった振りをして、ぼくは今日はジジンドンに行ってきた。今、帰ってきて、街にぶらぶら遊びに来たのだ、と言った。

ぼくの話はよく?通じたらしく、

「そうですか?愉しかったですか?」と言った。

「とても愉しかったです。でも、途中が怖くて、とても疲れました。」と答えた。

彼女はまた、ちょっと早口の中国語で何か話しかけてきた。

ぼくは良く聞き取れなかったので「ティンブドン」と言うと彼女はもう一度ゆっくり話してくれた。

ぼくは二度目も分からなかったけれどもう「ティンブドン」とだけは言いたくなくて「ソウデス対了。」と返事して、

「我明天早上６点回去」

とだけ言うと、急いでる振りをして「再見!」と言って手を軽く挙げて別れた。

喋れたら、一緒にお茶でも、と言いたいところなのに残念だった。

ホテルに帰るとガイドの張クンからのメモが届いていた。５：４０にモーニングコールをします。６：１０には迎えに行きます。とのことである。毎晩、寝不足になる。

我がサポーター達からもひっきりなしに連絡が来る（メールで）小燕は、明日の長沙のホテルの予約が取れたこと、スケジュールについては上午は寮で洗濯、中午は新しいホテルへ４ッ星だけど５００元でいいとのこと（高いなぁ）。

下午は華天旅行社に来てくださいと細かい指示である。

実は、三回目の小荷物を鹿児島に送りたいのだけどどうしょう。時間がない。

いつものホテルが　６月１０日まで長沙で全国規模の会合があって２０万人の人がホテルを予約してくるので部屋代も５０％アップする、との通告でキャンセルしてしまったら、本当に取れなくなってしまい華天に頼んでいたのである。かねての二日分の宿泊費にはまいった。

上海の李黎からもメールが届いた。

「慶二先生７日下午凡点到上海我去接Ｎｉ。要我為 Ｎｉ（あなた）予定大酒店馬（マ）？」

ぼくの長沙滞在もいよいよ終わりが近づいてきた。

明日、一日長沙にいて明後日は朝から最後の観光ツアー湘南にあるチェン州に一泊ツアーに出かける。

このあと実際の行程は6月5日から chen zhou へ行き、その後上海（朱家角）を経て僕の旅は終わるのですが、記録的には

このあと成都～峨眉山～九寨溝・黄龍を書き込んでいくので、その順で行きたい。

従ってこの次は成都ということになる。

5月8日～12日へと遡る事になります。